
点 + 線 + 恋 - 矢印 = 僕達

ナナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

点＋線＋恋－矢印〃僕達

【Nコード】

N8288Q

【作者名】

ナナ

【あらすじ】

これは「雨」「チョコレート」「滑り台」をテーマにして書いた、恋愛小説です。寧ろ恋愛風味小説です。とゆるか三題噺です。

「僕」と「君」のちよつと歪んだ愛の話です。

あんまり病んだ話にならなくてホッとしています。

―パパに殴られた…。

あれはちょうど、僕達が10歳になるかならないかの時だった。君は真っ赤に腫れた頬を押さえながら、僕の家までやって来た。瞳には涙が一杯溜まっていて、今にも零れ落ちそうだった。

―あたし、もうお家に帰りたくない。

―じゃあ、ずっと僕の所に居たらいいよ。僕が君を守ってあげる。

―本当？あたし、ずっとここに居ていいの？

―うん。

僕が頷くと、君は顔を綻ばせた。雫がはらはらと下に落ちた。花びらみたいだった。

結局、君のママが家に連れ戻しに来たけれど。

―ねえ、僕ね、良い物があるんだ。ママに貰ったの。君にもあげる。目、瞑って？

君はおかしそうにクスクス笑いながら、目を閉じた。

―口、開けて。

素直に口を開ける君。僕はその口に、そっと“良い物”を放り込んだ。君は驚いて、瞳をパチッと開けた。

―えっ、あつ、何？甘い…。お菓子？

―チョコレートだよ。

君は心底嬉しそうに笑った。きっと僕も。
小さいけれど、確かな幸せがそこに在った。

僕は目を覚ました。意識がゆっくりと覚醒していく。

「…夢か」

随分懐かしい夢を見たものだ。愛しい愛しい、君の夢。
僕達は高校生になっていた。僕は相変わらず君に正義感にも似た強い愛情を抱き、君は他との関わりを絶つほど僕に依存していた。それを良くないと思いつつも、恋人ごっこ染みた事を続けていた。

何て、歪んだ関係だ。

「…気持ち悪いな」

何となく胃が重い。僕は朝食を食べずに家を出た。

「お早う」

外には君が居た。いつも通りに君が。いや、一つだけいつもと違った。腕に新しい包帯が巻かれている。

「…また、死のうとしたの？」

「だってママが、お前なんか死んじゃえって言うんだもん。死ぬしかないでしょ？」

君はケラケラと笑った。

「でも、貴方の事を考えたら、死ぬのが怖くなって…。だから、そんなに深くは切ってないの」

眩暈の様なものを感じた。何だろう…？今日は調子が悪い。あんな夢を見たからだろうか。

いつから僕達は曲がっていったのだろう。

あの頃は、あの夢の中では僕達はもっと純粋なもので繋がれていたんじゃないだろうか。それとも傍から見れば、僕と君の関係は何ら変わりはないんだろうか。

「今日是一緒に帰れる？」

君は期待する様な目で僕を見る。

「ごめん。今日は委員会があつてね。…先に帰っててくれる？」

君はあからさまに哀しそうな顔をしたが、それでも微かに頷いた。

「本当にごめん…」

「別に…、大丈夫。あたし良い子ちゃんだもん」

ありがとう、と言って僕は君の額にキスをした。君の頬が幽かに桜色に染まる。

まるで姫のご機嫌とりをする従者みたいだ。

…いや、そのものか。

委員会は下らないものだった。正直、やる意味が見受けられない。しかも外は雨だった。傘は、無い。

「…今日の僕の運勢はビリか」

僕は浅く溜め息を吐きながら、雨の中に飛び出した。冷たい雫が僕を打つ。こうなったら、走ってなるべく早く家に着くしかない。濡れる事は必至だが、学校で待っていても止むとは思えない。

僕は全速力で歩道を走る。何度か人とぶつかった。一瞬感じる温もりに、僕の体が相当冷えている事が分かる。

道の端に小さな公園が見えた。小さい頃、何度か遊んだ事がある。

— えへへ、あたし今、誰よりも高いよ！

— すごいや！僕より大きい！

滑り台の天辺で、交わした会話。多分まだ、綺麗だった頃の僕達。懐かしさに駆られ、ちらつと滑り台を見る。

君が居た。

滑り台の下、丁度屋根みたいになっている所に君が居た。

「どうして…っ」

僕は慌てて君の方に走って行く。

「あっ」

君は僕を見つけると短く声を上げ、微笑んだ。

「何してるの？滑り台の下で」

僕がそう尋ねると、君は空を指差した。

「雨宿り」

嘘だ、と僕は言った。

「目が赤い」

君は唇を少し歪めた。

「今度は誰に苛められたの？」

「……………クラスの子」

君は小さく呟いた。

「気持ち悪いって…。ねえ、貴方もそう思う？あたしの事、気持ち悪い子だなんて、そう…、思う？」

「思わないよ」

君は嬉しいと叫んで、僕に抱きついた。僕より遥かに冷たい体だった。

「あたし、傍に貴方が居るだけでいい！他の子があたしの事を何と言おうが、貴方があたしの事を好きでいてくれたら、愛してくれていたら、それでいい」

「うん」

暫く、君は貪る様に僕の胸に顔を埋めていた。君の体温と、君の匂いを僕は感じていた。百合の様な甘ったるい匂いがした。

「ねえ、良いものをあげるよ。目、閉じて」

君はあの時と同じ様に目を瞑る。笑いながら。

僕はそっと君の唇に、僕の唇を重ねた。

君を、とても愛しいと感じた。

歪んでいたっていい。曲がっていたっていい。

僕は君が好きで、君は僕が好きで…。それでいいじゃないか。

十分だろうか？

ふと、昔の僕達が眼前に現れた。

―あたし、あなたのお嫁さんになりたい！

—じゃあ指きりだね。

絡まった小指は、今の僕達に似ていた。

（後書き）

ちゅどーん

慣れない恋愛モノとか書くもんじゃありませんね。いろんなジャンルに挑戦しよう！と思って書きました

「雨」「チヨコレート」「滑り台」は、友達に出したお題なんですが、ちよつと書きたくなつて…

こんな駄文を読んで下さり、ありがとうございます！

一応確認しましたが、誤字・脱字がありましたらこつそり教えて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8288q/>

点 + 線 + 恋 - 矢印 = 僕達

2011年10月8日17時32分発行